

地域連携室における倫理的課題

ー退院支援・調整での意思決定支援を考えるー

医療法人共栄会 名手病院 地域連携室 平田綾（社会福祉士）
野口真右 深野文香 溝上俊一 柴田かおり 稲垣伊津穂 池田宜史

1. はじめに

A病院は 104 床の地域密着型中小病院であり、回復期リハビリテーション病棟、障害者施設等一般病棟、一部地域包括ケア病床と、3つの機能を持っている。高齢化が進む中、疾病を抱えながらも住み慣れた地域で自分らしい生活を続けるために、地域連携室の社会福祉士（以下 MSW）が各病棟に配置され病院と地域の窓口となり退院支援・調整を行っている。患者・家族を取り巻く課題は複雑化、多様化しており、その中で患者、家族の意向の相違や多職種間の調整、また病院という組織の中でベッドコントロールを意識せざるを得ない状況において MSW は、様々な倫理的課題を抱えながら日々の業務を行っている¹⁾。

2. 目的

A病院では倫理的感受性を高めるため、毎年倫理研修を行っており、令和2年度の研修テーマは「意思決定支援の場での倫理的課題」であった。地域連携室では、「自分が今行っている退院支援、退院調整は、本当に患者本人の意思なのか？」ということに着眼し MSW の関わりについて振り返る機会とした。

なお、対象者には取り扱う情報は本研究以外の目的では使用しないこと、拒否をしても不利益にならないこと、個人情報の保護について文書と口頭で説明を行い、書面にて同意を得た。

3. 取り組んだ期間

令和2年8月21日～令和3年8月11日

4. 事例及び介入結果

80歳代男性。腸炎、脱水症により入院。入院当初は食思不振、倦怠感があったが、入院加療により徐々に改善。ADLは概ね自立レベルであるも、認知症により入院直前に妻が亡くなったことは理解していない。独居で子どもはなく、キーパーソンとなるのは近所に住む甥。

入院中、MSWが本人との面談を行い「自宅に帰りたい」という意向を確認し、甥夫婦から

も今後の意向や不安について伺った。家族だけのサポートに漠然とした不安を抱えていたため、介護保険サービス利用の提案とともに申請の手続きについて説明した。医師からの病状説明にも同席し、身体能力は保たれているが、新しいことを覚えたりイレギュラーな出来事に対応したりすることが難しいなど、入院中の現状、及び今後予測される事態について共有した。その後、ケアマネジャーを交えて、看護師、セラピストと共に多職種カンファレンスを行い、具体的な支援の方法を検討した。

話し合いを重ねる中、火の元の心配や徘徊による事故など一人暮らしは難しいのではないか、24時間見守る必要があるのではないかとの意見もあり、施設入所の方角も検討されたが、身体的機能が保たれており夜間はよく休まれていたことなどから、慣れた環境であればある程度はこれまで通りの生活が送れる可能性があることや、新しい環境にかえて混乱を来す可能性もあることなど、ご家族には双方のメリット、デメリットについて具体的にイメージできるよう、利用できるサービスの案内や、ご家族が担う役割について丁寧に情報提供を行った。「3か月もつか、1か月になるか、1週間かもしれないけれどやってみます。」とご家族の言葉で、デイサービス、ヘルパーといった介護保険サービスの利用調整を行い、自宅退院の運びとなった。それから、外来通院時に状況を伺いながら自宅での生活が1年続いた。

5. 考察

この事例では、家族に迷いはありながらも、最終的には本人の意向に沿って自宅退院が叶えられた。もちろん本人の意向だけがすべてというわけではないが、同じようにMSWが介入しながらも本人の意向である自宅退院が叶わなかったケースとの違いについて考察する。

まず、本人の意向確認について、担当病棟の入院患者全員に対してMSWが入院7～14日以内に初期面談、その後状況に応じて面談を行っている。今回のケースでは面談のたびに本人の口から自宅退院の意向を聞くことができた。MSWはその言葉を家族と共有し、自宅退院に向けての課題を整理しながらアプローチした。また、医師からの病状説明の場や各種カンファレンスにおいては、患者自身が自宅退院を希望していること、家族が不安に感じていることを医師とも共有したうえで説明の場が設けられていたため、患者、家族が今後の見通しを立てられるような説明がなされ、家族も不安に感じていることを質問することができた。

しかし、本人が自身の意向を言葉にすることができない場合はどうか。また、意向を言葉にしても、場合によってはこちら側の先入観や価値観で「認知症があるから」「このADLでは独居は無理」などと、本人の意向を現実的なものとして受け止めず、聞き流してしまっていることはないだろうか。

退院支援の場において、患者の連携への参加や意思決定を困難にする阻害要件として、専門職からの説明が患者、家族に十分理解されなかったり、専門職により提供される情報

が制限されたりすることにより必要な情報が得られにくいという問題や、患者、家族側の希望を専門職種側が十分に認識できていないことが挙げられている¹⁾。自身の価値観というフィルターを通して患者の言葉を聞くことで、患者の意向を確認したつもりになり本当のニーズを認識しないままでは、患者、家族にとって必要な情報が何かということを見失い、一方的な支援を押し付ける形になってしまう。

また、専門職である医療者側と患者・家族側には今後の療養生活について知識に大きな差がある。だからこそ、具体的なイメージの共有が必要である。ところが、実際はその知識の差によって病状説明やカンファレンスの際、無意識に『専門職側とクライアントとの間における情報の非対称により、上下関係が構築される』²⁾ことで、患者、家族側が医療者に質問したり、意向を伝えたりしにくい状況が起き、医療者側の「安心、安全」の言葉が優先されてしまうことがある。また上下関係の構築ということであれば、医療者側と患者・家族間だけでなく、専門職種間においても、患者・家族間においてもそれは構築される。患者が今後の生活をどのように送りたいのか、そのための支援についてそれぞれが持っている情報をすり合わせ多角的、総合的に検討し判断する場であるカンファレンスでの発言は平等でなければならない。しかし、実際は専門職種間の意見に相違があっても十分に議論が尽くされなかったり、あるいは家族の発言が本人の発言よりも影響力を持っていたりすることが往々にしてある。その結果、本人は自宅退院を希望していたにも関わらず、発言力のある人に引っ張られる形で施設入所へと話が進んでしまうというケースがある。本人の抱える病気や生活環境、家族背景、価値観等はさまざまで、本人の意向がすべてとは一概に言えないが、MSWが退院支援、調整の結果に対してジレンマを感じるのは、本人の意向の捉え方、カンファレンス等での自身の姿勢によっては異なる結果があったと感ずるからではないだろうか。

患者、家族の言葉を聞き、必要な情報が正確に伝わるよう自分は専門職として積極的に発言できたのか。家族はどんなことに不安を感じているのかを丁寧に聞き、多職種がコンフリクトを恐れず意見を出し合うことで、不安を軽減する方法が見つかるかもしれない。

在宅医療に取り組む矢野博文氏は著書の中で多職種連携の重要性について、『各自の職域で義務を果たす仕事をして、本人のためにならなければその仕事には何の意味もない』、『多職種が対等な立場で、かつそれぞれの職種がプライドを持って協働していかなければ、今後日本に押し寄せてくる多死社会の波を乗り越えることはできない』³⁾と述べている。

MSWが同じように介入していたとしても、その関わりを丁寧に振り返ってみると、本当の意味で専門職として十分な関わりができていなければ患者本人の意思に沿った退院支援、退院調整とは言えないということ、この当たり前のことをいかに日々心にとめることが重要であるかについて改めて考えさせられた。

6. おわりに

私たちの支援は、在院日数の短縮、目まぐるしい日々の業務の中で、形だけのものにな

っていないか。コロナ禍における面会制限で、直接本人が家族に思いを伝えられる機会も減っている中、地域連携室のMSWとして自分にできることは何なのか。

本人の思いに寄り添い意思決定支援ができるよう、地域連携室では日々の業務報告の中で様々なケースの共有や振り返りを行うことで倫理的感受性を高め、本人・家族の声を本当の意味で『傾聴』し、『能動的に受け止める』よう心掛けている。「入院」によって、残された時間の過ごし方を大きく変える決断をするかもしれない、ましてその決定が本人を置き去りにしてなされてしまうかもしれないということの重大さを認識し、本人・家族の揺れ動く思いにアンテナを張り続ける。そうすることで、誰かの意見に盲目的に従うのではなく、専門職として本人や家族が方針を決定するために必要な情報を積極的に発信し、立ち止まって一緒に考える時間を大切にしたい。

7. 引用・参考文献

1) 北川裕美子, 吉田浩子: 医療ソーシャルワーカーにおける職業上の葛藤経験の分析, 川崎医療福祉学会誌, Vol. 28 No. 2, p. 455-464, 2019

2) 礪玲子, 飯島節: 高齢者の病院退院時における多職種・諸機関間連携へのクライアントの参加と意思決定についての現状と課題, 国際医療福祉大学学会雑誌, 21 (1), p. 10-20, 2016

3) 矢野博文: 生きること 終うこと 寄り添うこと, 幻冬舎, p.99-102, 2021

杉浦敏之: 続・死ねない老人～希望の最期を叶え、後悔せずに見送る～, 幻冬舎, 2021

宇都宮宏子: 退院支援ガイドブック「これまでの暮らし」「そしてこれから」をみすえてかわる, 学研メディカル秀潤社, 2015